●産業開発

カシミヤ産業の再生と発展のために

内田敦之

◉カシミヤとモンゴル国

ここ数年、中国製の安価なセーターが大量に輸入され、日本人にとってカシミヤ製品はずいぶん身近な存在になった。軽くてやわらかく、暖かい繊維カシミヤは、もともとヤギの首から脇にかけて生えているうぶ毛である。このうぶ毛を、気候が暖かくなって自然に抜け落ちる前に鉄製のくしでかきとって人間が利用する。かきとったままの原毛には、うぶ毛（ウール）とともに刺毛（ヘア）、土砂、フケなどが混ざっているので、これからうぶ毛だけを取り出し使うのである。

世界のカシミヤ原毛生産量は約一万トン（一九九四年）である。そのうち約七〇％が中国（内蒙古、新疆ウイグル、チベットなど）、約二〇％がモンゴル国、その他をロシア、イラン、イラク、アフガニスタン、インド、トルコ、ニュージーランド、オーストラリア、アルゼンチンなどが産する。その名がしめすようにインドのカシミール地方が原産である。

カシミヤは、繊維が長く、強く、タッチがやわらかで、不純物の少ないものが高品質といわれる。世界でもっとも品質がよいとされているのは、中国内蒙古のイフジョー盟、バヤンノール盟、赤峰市産のものである。繊維が長く、強く、不純物が少ない点で、この中国産を上回る特徴をもっているのが、モンゴル国のカシミヤなのである。なかでも、スフバートル県の「オラーン」、ザブハン県の「ハルタル」、フブスグル県の「エルチム」、オブス県の「ウルギーン・オラーン」などが、優良品種である。

ヤギの頭数はモンゴル国全体で八五〇万頭（一九九五年末現在）で、世界第九位である。モンゴルの主要家畜（ラクダ、ウマ、ウシ、ヒツジ、ヤギの「五畜」）全体二八六〇

草原のヤギとヒツジ。

万頭の約三〇％を占める。民主化後の五年間で他の家畜と比べて著しく増え、二〇〇万頭以上も増加した。それには、牧民たちの間に「カシミヤはもうかる」という話が広まり、ヤギを増やすことに躍起になった事情がある。また、ヤマーニー・ボードグなどのヤギ料理をあまりしなくなったためともいわれている。ヤギを多く飼育しているのは、バヤンホンゴル（八八万頭）、ゴビアルタイ（七九万）、ホブド（七〇万）、ウブルハンガイ（六一万）、ウムヌゴビ（五五万）などの県である。

いうまでもなくモンゴル国は伝統的な遊牧国家であり、牧畜業は主要産業の一つである。牧畜就労人口は三四％ほどをしめ、畜産品はGNPの三〇％にのぼる。輸出産品においても鉱物資源についで食肉、羊毛、皮革などの畜産品が上位をしめ、なかでもカシミヤは国際競争力があり、外貨獲得の手段としては銅精鉱（一億五三八〇ドル）に次いで大きなウェイト（二四九〇万ドル＝原料・製品を含む）を占めている。

旧体制が崩壊し、経済再建をめざすモンゴル国にとって牧畜業とその関連軽工業の再生と発展は重要な課題である。「人口が少ないわが国は、カシミヤを中心とした

軽工業と観光業に力をいれ十分に発展させることができれば、国はやっていけるんですよ」と政府のある役人から聞いたことがある。

◉カシミヤ産業がかかえる問題

社会主義体制下では、中央調達庁による中央集荷システムが確立されており、牧民が生産したカシミヤはすべて国営のゴビ・コンビナート（現ゴビ社）に集められていた。また、かつては品質にきびしい基準があり、牧民が刺毛や不純物を取り除き、色分けした上で納めていた。モンゴル国のカシミヤといえば、不純物が少なく信頼のおける品質を誇り、また価格も市場の動向に左右されることなく安定していた。

市場経済への移行にともない、中央集荷システムが崩壊し、生産者から直接買い付けがおこなわれるようになった。カシミヤは単価が高く、もうけが大きいことから、カシミヤの知識のない者も「チェンジ」とよばれるブローカーとなってカシミヤ産業に参入した。どんなカシミヤでも売れるようになったため、かつて政府から課されていた品質の基準も守られなくなってしまった。

さらにカシミヤは重量（キロ単位）で取引される。そこで、安易に収益をあげるため、増量する方法がいろいろとられるようになった。一九九四年には、土や砂を入れて増量したカシミヤが多く見られた。さらに、羊毛、ラクダやヤクの毛、タルク、土、セメント、油、木屑、石、塩、鋳物、鉄球、レンガを入れたものさえ出てきた。ゴビ社によると同社が一九九五年に買い付けたカシミヤの一三～一六％は上記の不純物であったという。被害総額はかなりの額になったようだ。中国との国境の町エレーン（二連）にはカシミヤを増量する専門業者までいるという話もある。

不純物の中でとくに羊毛や合繊などは、原毛の段階で取り除かないと、整毛、紡績など加工により細かく切れて混ざり、取り除くのが非常にむずかしくなってしまう。セーターなどの製品になってしまえば、売り物としてはまったく価値がなくなってしまうのだ。

何人かのモンゴル人に「なぜこんなにひどいことをするのだろうか」と問いかけると、「中国人が教えたのだ」と答えてニヤニヤしている。モンゴル人は、目先の金のためにモンゴルの誇りをも忘れ、モンゴルの名に泥をぬっていることに気がつくべきである。

この不純物をまぜる行為は、買い付け業者の品質チェックが年々きびしくなっており、減少傾向にある。ブローカーを通して買い付けた原料の品質が悪くなったため、ゴビ社をはじめカシミヤ関連企業が地方に駐在事務所を開設するなど、現地調達する方向に向かったことも品質向上に役立った。

モンゴルのヤギの品種は前記の優良種のほかに、「ゴビ・ゴルワン・サイハン」や「オーリン・ボル」など大型品種がある。これらは収量は多いが、その毛は一般に「カシゴラ」「エルリーズ」と呼ばれ、優良種のカシミヤより繊維が太く、半値以下で取引されている。ゴビ社をはじめカシミヤ加工業者は、買い付けの際に選別し、カシゴラについては引き取らないか、安い値段で引き取っている。

もともとこれらの品種は、カシミヤが多くとれる品種として研究されたが、品種改良に失敗したということである。統計的には数％しかいないことになっているが、実際にはかなり多いらしく、「モンゴルのヤギは半数近くが品質の悪いヤギになってしまった」という専門家もいるほどである。さらに民主化後、品種改良の研究が放置されてきた経緯もあり、今日の状態にいたってしまった。これにはヤギを増やすために一年に二回も種付けをしたり、子ヤギに種付けしたりする無茶をやったため、ヤギの個体能力が低下し、カシミヤの品質が劣化していることにも起因するようである。

この問題解決に向けて、一九九六年一月、カシミヤ生産者（牧民）、製造業者らが集まり「カシミヤの品質、買い付システムを改善しよう」というテーマで学術会議が開催された。この会議の結果、生産者、加工業者、政府、行政に対してさまざまな提案がなされた。その一つとして、優良種の種ヤギの展示会、オークションを開催することが企画された。第一回展示会は一九九六年秋、ゴビ社が中心となって開催された。

民主化後、中国との経済関係が復活し、カシミヤ原毛が大量に中国に流出するようになった。これを防止し、さらに国内産業の育成や外資導入をもくろんで、一九九四年四月、カシミヤ原毛輸出禁止令「第六三号令」が出された。これにより、カシミヤは「整毛」と呼ばれる第一次加工（原毛からうぶ毛だけを取り出す）をしなければ輸出できなくなった。第六三号令は、にわかに発令された

ため、日本をはじめ外国のカシミヤ関連業者の間に混乱がおきた。この後、ウランバートルのみならず、地方にもたくさんのカシミヤ整毛工場が建設された。ただし、整毛加工は日本の技術を導入したゴビ社のものが品質がすぐれており、とくに一九九五～九六年は、委託加工に行列ができるなど、同社の独占状態が続いた。

この二年間は同禁止令を継続するか無効にするかという議論が何度も持ち上がり、その都度、関連業者に動揺がおきた年でもあった。今後も、カシミヤ産業に対しどういう政策をとっていくのか、一貫した政策が打ち出されなければ、各社は引き続き右往左往させられることになろう。

◉貿易の難しさ

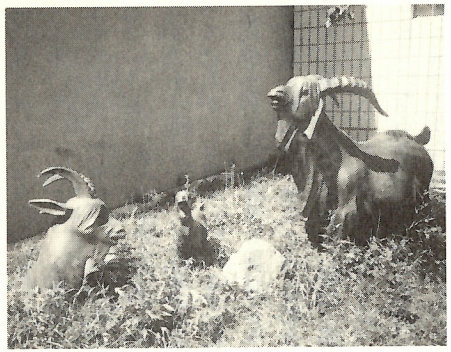
輸出手続き上の問題としては、品質による価格差がないことには戸惑う。税関でカシミヤの輸出許可をとる際「これは品質が悪いためこういう安い価格で契約している。この原料を日本で再加工すれば、歩留まりがこのくらいなので、このくらいの価格が妥当である」という説明をしても「これは整毛したカシミヤである。値段はこれ以上であるべきだ」「この価格以下は許可しない」という一点張りである。しかも税関職員が主張する妥当な価格がいくらであるということは法律には書かれていないのである。税関職員と話しても、カシミヤの品質に関する基礎的な知識ももっていないようなので、こんな職員たちとああでもない、こうでもないと押し問答をしていると、本当に時間と労力の無駄だと感じる。

それでは、価格の安いカシミヤはまったく許可が出ないのかといえば、抜け道もちゃんと用意されており、何らかの方法で輸出もされているようだ。国家財政にとって重要な輸出産品に対してどう考えているのか、まったく理解できない。

さらに、輸出するために必要書類一枚を取得するにしても、署名・捺印する担当者や上司が不在であるといっては待たされる。必要な書類をまとめて一度に教えてくれることは少なく、申請のやり直しのたびに、あれが不備、これがない、あれを持ってこい、これを持ってこい……。そんなやりとりをしているうちに、仕事が遅れていく。このことが経済にどれほどマイナスになっているかがわからない。旧体制、官僚制の悪癖が残っているのだろうか。

密輸も大きな問題の一つである。南の国境からは内蒙古へ、西からは新疆へ密輸され続けている。羊毛やラクダの毛に混ぜる、ソファーなどにクッション代わりに入れる、ジャンパーの詰め物にする、体にガムテープでグルグル巻きにする、あらゆる方法で密輸が試みられている。一部は税関で没収されているものの、税関職員数の不足など検査態勢が十分でないこともあり、抜け穴だらけである。さらにワイロがとびかっているということも聞いた。「カシミヤ原毛を密輸するなら手伝ってやるぞ」と中国商人が堂々と言っているということも聞いたことがある。

ゴビ社。



ゴビ社ビル入口にあるヤギの像。

◉カシミヤ産業の可能性

カシミヤ産業の再生・発展のためには、政府主導のプロジェクトとして取り組む必要がある。財政的な支援を日本その他外国、国際機関からの援助に求めることになろう。ただ、忘れてはならないのは、できることから少

しずつやっていくことではないか。どうも、モンゴル人とつきあっていると多額な投資をしてもらって、一気に大きなことをやろうとする傾向が見受けられる。できる範囲のことからはじめてコツコツやるという姿勢は、とくに日本人と協力してやっていくとき必要だと思う。

中国との微妙な関係にとらわれがちであるが、品質・生産量とも世界に誇る内蒙古との協力関係も考えていく必要がある。内蒙古の品種改良、品質管理、輸出システムなどを参考にし、すぐれた点は積極的に取り入れていく柔軟性をもってはどうだろうか。

一九九六年、カシミヤ買い付けが本格的になる五月、ラジオである牧民が「原毛の輸出を禁止したために生産者であるわれわれ牧民が大きな損害を被っている。自由化すべきである」と声高に主張していた。生産者である牧民が値段をたたかれて、ブローカーが大きな利益を得ることがまかり通っているのである。

劣悪な条件で暮らす牧民のために、牧畜所得の向上、医療、教育、交通など生活環境を整備する必要がある。どうもこの国は都市住民の暮らしが、地方の牧民の犠牲の上に成り立っているところがあるように思えてならない。苦しい条件で暮らしながら伝統を守り、国家を支える牧民が相応の利益を得るようなシステムの構築を考えなければこの国の未来はない。それとともにカシミヤの情報・知識を入手する方法を確立し、牧民の側でも品質の向上につとめることも不可欠である。

さらに今後は、ヤギの増加、飼育に関してエコロジーバランスを考慮に入れる必要が出てくるであろう。モンゴルのきびしい自然と共生してきた遊牧文化であるが、伝統と新しい技術をうまく組み合わせた発展を目指してほしい。

また、少し前に比較すれば、ずいぶんよくなったが、製品の色やデザインについては改善の余地がある。社会主義時代とちがい、情報収集も自由なはずである。製造業者は、製品の色やデザインについてはもっと努力しなければならない。

生産者、加工業者、製造業者、政府が歩調を合わせて取り組み、モンゴルがカシミヤ製品を世界に誇れる日が来ることが望まれる。

コラム

携帯電話の流行

内田敦之

ここ数年、政府高官や大企業の幹部が携帯電話片手に仕事をするのをよく見かけるようになった。これは「スタンツ・タエ」と呼ばれ、親機がオフィスなどに設置されて子機を携帯にする電話で、設備投資すれば経費は普通の電話と変わらない。

一方、日本とモンゴルの合弁会社が昨春よりサービスを開始した本格的な携帯電話もあり、こちらは設備費のほかサービス料、市内電話も有料と少々経費がかさむ。一般庶民には手の届かないあこがれの電話である。

モンゴルで人と会うのは一苦労である。やっとのことでつかまえてアポイントを取ってもすれ違いで会えない場合も多く、公衆電話も普及していない（一九九六年秋からカード式が都市でお目見えした）ため、人と確実に会うには携帯電話は必需品である。目的の人物が突然休暇に入って「行方不明」になる前に、頻繁に電話をかけて、しっかりつかまえタイミングよく約束の場所に直行する。これぞモンゴル・ビジネスのコツである。

この携帯電話、実用性もさることながら、悠久の遊牧文化をにない、移動が生活の一部であったモンゴル人の美学にピタリと合っているのではなかろうかと思う。

ただ残念ながら、この携帯電話の恩恵を受けているのは、都市に住むごく一部の人だけで、地方の遊牧民にはまったく縁のない話なのである。民主化後、国家のサービスから切り離され、急病人が出るなど緊急の際には通信の術がまったくない遊牧民。彼らが馬上で携帯電話を片手に不自由なく都市と連絡でき、さらに世界へ発信できるようになるのはいつの日だろうか。

アジア読本
モンゴル

一九九七年一二月五日　初版印刷
一九九七年一二月一五日　初版発行

編者――小長谷有紀
発行者――清水　勝
発行所――河出書房新社
〒151　東京都渋谷区千駄ケ谷二―三二―二
☎〇三―三四〇四―一二〇一（営業）
☎〇三―三四〇四―八六一一（編集）
振替　〇〇一〇〇―七―一〇八〇二

装丁　松田行正＋竹内紀子
印刷　三松堂印刷株式会社
製本　小高製本工業株式会社

© 1997 Printed in Japan
定価はカバー・帯に表示してあります。
落丁本・乱丁本はお取替えいたします。
ISBN 4-309-72464-7